

○メタセコイアの葉序 (Phyllotaxis of *Metasequoia*) (前川文夫 F. MAEKAWA)

本屬は三木茂博士によつて本州中部各地の第三紀下部鮮新層から發見記載された化石針葉樹であつて、最も特徴とする處は、毬果の鱗片が明らかな十字型葉序に排列すること、長い細い果柄があること、葉は二列生であることである。これらの特徴はスギ科 (Taxodiaceae) 中ではむしろ異端者であるといつてよく、特に毬果の鱗片の排列はヒノキ科 (Cupressaceae) の特徴を示して、それとの類縁をも示すかの様である。枝は基部に鱗片葉の集りのある膨らみを持つたところから切れているから短枝的の性質が強く、その點は共存して産出するラクウショウ (*Taxodium* 北米に自生) やスイショウ (*Glyptostrobus* 中國南部に自生) と通づるものがある。昨年名古屋大學の學生諸君と尾張犬山附近の善師野で化石を掘つた時に多量に出て來た一見セコイヤと思はれる標品を後日精檢したところ、これが本屬であつたが、葉序についてみてもスギ科には入らぬことを見出した。三木博士の原記載 (日本植物學輯報 11: 261 (1941)) には葉序については distichous とあるだけであるが原圖 f. 8, D を見ると葉は枝の左右に二列をなしている上に二葉づつ對生している。しかも葉の附根が左右交互に枝の正面へ心持乗り出すように描かれている。又前記の標品を檢すると葉はたしかに交互に方向が少しづつふれているので各側共に葉は一枚置きに高く浮き上つている。これは對生の十字型葉序を×の位置に置いて背腹面から偏壓したので葉身が見掛けの左右展開を示しているものと解釋できる。かく見て來ると *Metasequoia* は現在の材料の示す範圍では莖から毬果へ全體を通じて對生十字型葉序の連續した展開であることになり、Cupressaceae とみるべきか或はその原始形と見たいところである。洪積世に入つてはじめて *Thuja*, 及び *Chamaecyparis* の化石が見出されることも或は關連があらうかと思う。ただ Cupressaceae では十字型葉序が背腹に壓伏されしかも周期的異葉性がこれに加つてゐるの違ひがあるが、幼生葉は明らかに長い針狀葉を持ちヒムロの如きは全株かかる幼生葉を持つてゐるなどからみても Cupressaceae が現在の鱗片葉並びに背腹性十字型葉序をえたのは比較的新らしいものと思はれる。

この屬は滿洲及樺太にも産出があり曾つて *Sequoia* の名で記載されたが胡先驥博士は *M. chinensis* (Endo) Hu の新組合せを發表した。(Bull. Geol. Soc. China 62: 106 (1946)). しかも同報文中に湖北及四川兩省に本屬の自生が見つかったことを述べてゐる。それはスイショウに類するところがあつて落葉性であるというが、化石屬が現生する事實として注目に値する。後報が待たれると共に私としては早く葉序を確めたいと念じてゐる。終りに胡博士の報文の借覽を許された本田正次教授に感謝する。

○メタセコイア追記 (前川文夫)

Sequoia の産地である米國では、この生きてゐる化石に多くの興味が惹かれてゐらしく、近着の Bull. Torrey Bot. Club 75: 439-440 (1948) の短報によると、本年 2 月